

飛耳長目〈第13回〉開催趣旨

日時	令和5年2月21日(火) 午前10時～
場所	安曇野市役所本庁舎 会議室 301
テーマ	ガーデンファームを通じた豊かな暮らしの実践
参加者	Garden Farm Life of Azumino 7人

参加者 オープンガーデンを通じて知り合った3名で活動をはじめ、2017年に Garden Farm Life of Azumino を立ち上げた。ガーデンとファーム(畑)、そこで営まれるライフ(生活)について考えていくという思いを込めた会。信州緑化フェアの理念に共感し実行委員会に参加したり、三郷文化公園のゴーラウンドガーデンに会をあげてボランティア参加したりしてきた。いろんな講座を開き、暮らしについて学んだりハーブの講習を受けたりと勉強してきたが、コロナでいろんなことが途絶えてしまった。しかし、活動趣旨である農地を守って地域の人たちと交流しながら生きがいや癒しの提供を通じて心豊かな暮らしを提案していきたいと考えている。

テーマ①【ガーデンファームとして農地を有効に使い、野菜を作り、花に親しみ、農家と非農家、世代間、地域との交流を進めるための現状の説明と取り組みについて】

参加者 23年ほど前から自宅の畑で花やハーブ、果樹、野菜を育てている。コロナ禍で休校となった子どもたちに花壇で花や野菜を育ててもらったが、外出できなかった子どもたちにとって安全で安心な場所となった。また、自分が病気療養中にも体調の良い時には畑仕事や庭仕事を続けたが、自然の中で気持ちが落ち着き、体力が回復していくことを実感し、自然や緑に触れることは園芸療法になると強く感じた。せんぜ畑でとれた野菜は食卓をととも豊かにしてくれるし、季節ごとの花などを飾ることで、生き生きとした気持ちになる。オープンガーデンでゲストを案内しながらいろんな話をする中で、「リラックスできる」「元気になる」といった言葉も聞かれ、嬉しく思う。これからもオープンガーデンを通して地域の方や観光で来た方など、安曇野の空間と時間を共有し、安曇野の暮らしを発信していけたらと思う。

参加者 今畑や庭をやっているところは元々耕作放棄地で、毎日木を切ったりススキを抜いたり、開拓農民みたいな生活をしてきた。だんだん周りがきれいになってきて、オープンガーデンをするようになると、「何しているのだろう」と遠目に見ていた近所の人が、オープンガーデンの草刈りをしてくれたり、狭い道の交通整理をしてくれたりと協力してくれるようになった。狐の散歩道だったところが今は多くの人が散歩するようになり、いろんな人が庭を訪れてくれる。特に若い人が、「親から譲り受けた土地を持って余していたが、こうして花や果樹、野菜を育てながら生活できたらすごく楽しく農業ができる」と言ってくれる。有明は移住者が多く、これから家を建て庭や畑を作りたいという方が相談に来てくれるので、苗や種を渡しながら話すことがある。また、有明の森認定こども園の園児が園の行事として年間を通じて庭に来てくれる。その後親と一緒に再訪し、花や草の説明を親にしている子どもたちの姿を見るのが嬉しい。高齢者施設を建てたいと思っている方がオープンガーデンに来て、「せんぜ畑のある高齢者施設を作りたい」という

お話もいただいた。この活動をしていると、思いもよらない人たちとつながって、魅力的な安曇野になっていく事へのお手伝いができるのではないかと思う。家の前も耕作放棄地で、樹木や雑草で大変なことになっていたが、農業委員や消防団に協力してもらい、5年ほどかかって農地として復活しつつある。そこを見た若い方が、花を育てて花屋に安曇野の花を届けるとか、トマトを作ってトマトソースを作りたいといった話をしてくれた。また地元と連携し、庭でガーデンコンサートを開催しており、前は60人近く集まった。コロナ禍前は飲食自由だったので、自治会を退会した人も来てくれ、地域の縁が復活した。またハロウィンには、周辺の家6軒くらい回るイベントを行い、うちの庭でかぼちゃをつかった料理やおかしをふるまっている。散歩する人も増え、地域との交流が生まれている。こんな風に、楽しみながら本当に「住んでよかった安曇野」を実感している。

参加者 高齢になると庭作業が大変になってくるので、「ゆいの会」を立ち上げ、忙しい時にお互いの庭の手伝うといった活動をしている。その中で、植物の植え方や育て方、道具の使い方などオープンガーデンを見ているだけではわからないことを知ることができ、新しい発見があり、楽しくて助かる。非農家で家庭菜園など始めた方は、こういう交流があることで農作業に楽しさが生まれてくるかと思う。

市長 ガーデンファームやせんぜ畑というのは普通に使われる言葉か？

参加者 せんぜ畑は野菜を作ったり、仏壇に供える花を育てたり、リンゴなどの果樹も植わっているようなもので、家族が一年間使う程度の野菜や花を作る庭といった考え方のもの。呼び方は違うが日本中にあり、安曇野ではせんぜ畑と呼ばれてきた。イギリスでは立派なお宅にもポタジェ(家庭菜園を意味するフランス語。スープを作るための野菜を栽培したこと由来する)があるし、一般市民のお宅でもせんぜ畑のような庭を作っている。

参加者 安曇野と北関東の一部にしか「せんぜ畑」という言葉は残っていない。安曇野でも農家の方でないと知らない。若い人たちも使わなくなってきているので、言葉が無くなってしまう。

市長 オープンガーデンで有名な小布施には何度か訪れたが、せんぜ畑ではなく正に庭。安曇野の場合、せんぜ畑と庭が融合していて独特の風景というところがおもしろい。

参加者 オープンガーデンというところどこもだいたい庭だが、安曇野は野菜畑も含まれていて独特なので大事にしたい。特に都会からオープンガーデンを見に来た人は、野菜畑を見ている時間の方が長いくらい注目する。だから絶対、安曇野は融合してやるべきだと思う。熊井明子先生もこの会に活動に関心を持ってきている。安曇野のブランドや宝にしてみらいたい。

参加者 イギリスでは畑も付いたものをガーデンといい、日本人が憧れるコテージガーデンは古い農家があつて、畑があつて、花があるというもの。これが日本に来た時に、庭の部分しか取り上げなくなってしまったのが現状だと思っている。なので、日本ではガーデンというと「庭」としか言われないが、本来せんぜ畑と同じようなもの。

市長 制度が変わり家の周りにある農地は非農家でも買えるようになった。例えば移住者の方が空き家をリフォームして住む場合、隣接する農地は所有できるようになったので、せんぜ畑ができる。イギリス風のもいいけど日本庭園風のところがあってもいい。両方あった方がいいと思う。ガイドブックを市で作るといことも考えられる。

参加者 平成30年に協働事業提案制度を使い、令和元年の信州花フェスタの時には都市計画課と協働でガイドブックを発行した。それ以降は市の印刷機を使わせてもらい、3,000~4,000部ほど作成し、支所や観光協会、図書館にも置いている。観光協会に置いてある分は全て無くなるほどの人気がある。

参加者 山麓線には工房やレストランがたくさんあり、観光客が訪れるので、オープンガーデンも目的地の一つとなり、県外から訪れた方が宿泊してそれらを回るといった流れができれば理想。

市長 検討が必要だが、会でガイドブックの編集をし、行政でお金を出して発行することができるのでは。

参加者 安曇野スタイルは周りの飲食店等を巻き込んで取り組みをしているので、私たちの会も一緒になってやっていければと思っている。一つの団体になる必要はないが、あちこちに自主的に活動をしている団体があるので、一緒にやっていく機会が増えればと思っている。

市長 広報あづみので取り上げることができる。オープンガーデンを知らない人も多いので、知ってもらう機会に活用してもらいたい。

テーマ②【せんぜ畑を市内のみならず市外にも広げる方法】

参加者 せんぜ畑の主役は花畑ではない。かつて食生活改善として「具沢山味噌汁運動」という取り組みをした時のキャッチフレーズが「鍋に火をかけて せんぜへ突っ走る」だった。そのくらい近いところに新鮮で豊富な野菜があり、具沢山の味噌汁とご飯一杯で十分栄養が摂れるという食文化があった。せんぜ畑で作る野菜が命の糧であり、食卓や仏壇に飾る花を心のゆとりとして感じることができた。そういった「せんぜ畑」にこだわった活動をしていきたい。

市長 一家の稼ぎ頭たちは農業として田んぼや畑に出かけて行く。家に残る高齢者や女性がちょっと作ったのがせんぜ畑だと思う。

参加者 そういう本来のせんぜ畑を作ってきた人たちに光が当たるようにしたい。タンパク質系の食品をろくに買えなくても、せんぜ畑で何とか食卓をつないできたという願いや想いをガイドブックなどで表現できたらと思う。

参加者 ガーデンファームの活動は始まったばかりだが、思ったほど広がりを見せていないというのが実情。15年前、NHKで「趣味の園芸 やさいの時間」という番組がスタートしたのを見て、それだけ野菜づくりの需要があると感じた。一方で農業後継者が不足し、耕作放棄地が増えているという課題があり、現代版せんぜ畑・ガーデンファームを広げることによって、いろんな人の共感を

得て生きがいにつながるのではないかと思った。ただ実際には農家の方との連携がうまく進んでいかない。なぜか考えてみると「せんぜ畑があたりまえ」だからわざわざ活動に入ろうとしないのではないか。例えば、拾ヶ堰などで北アルプスに向かって水が流れている光景を当たり前と思っていたが、観光客から指摘されて初めて当たり前でないと気が付いた。それと同じことが起きていると考えられる。この壁は今の私たちの活動だけでは乗り越えられない。農家、農協、行政、福祉、保育園などとの連携を考えていく必要があるので、こういう懇談の場があることで、会でやっていることを安曇野市の特徴として捉えて、皆さんと連携していきたい。

参加者 組織化し連携を広げていくことをどう考えるか。「花は好きだが関わらない」という人もいるし、オープンガーデンやこの会の活動は個人の自主的な取り組みであり、望む人が参加すればいい。一方で、良いなと思いつつも一歩踏み出せずにいる人たちに一歩踏み出してもらう方法を考えたい。オープンガーデンに取り組むのは敷居が高く見えるし、見せてもらうのもハードルがある。安曇野にはオープンガーデンではないが立派な庭作りをしているところもあり、塀が無ければ気軽に入れるかなと思うこともある。生垣ならいいけど、ブロック塀とか塀に囲まれてしまうと入れない。自然に「庭っていいな」と思ってもらえる作り方も一つの手立てかと思う。もう一つは、車社会であることによって「気付き」が難しくしている。歩いて安曇野を知ることが少なくなっている。サイクリングの利用度も上がったと聞いているが、ここに住んでいる人間は歩くことが少なくなっている。住んでいる人々がゆっくり歩いて街を楽しむことが少ないのも、どうしたものかと感じている。

市長 小布施は歩けるが、安曇野は地形的に難しいのが現実。いくつかのまとまったところであればいいのだが、3ヵ所見ようと思ったら1日かかる。車で行くと駐車場も大変なので、自転車で回ってもらうというのも一つのアイデア。せっかく民間で自由にやってきたところに行政が入っていき、先頭に立って取り組んでいくというのは変な話なので、協力するという立場。規則で成り立っているような「組織立った組織」ではなく、気が合うからやりましょう、といった緩やかな連携がいい。

参加者 ゆるくつながるといい。その「ゆるくつながっている」ということが多くの人に伝われば良いのではないかと思う。

テーマ③【農業の持つ多面的機能】

参加者 第2次安曇野市総合計画があるが、市の職員が実施してだけでなく、市民団体をうまく生かしてもらいたい。市民の意見が大切な時代であり、協働によるまちづくりの推進を目指す中で、健康づくりの推進や安曇野ブランドの推進といった目標を達成するため、オープンガーデン・せんぜ畑をそれぞれの部署で使っていってもらえればいい。移住促進事業でも、農地付きの古民家を買って、畑を持って余ってしまう人に私たちの活動を紹介してもらうことで、移住者にも知らせ、PRができる。若手市職員にも見に来ていただきたい。遊休荒廃地活用のヒントになる。

市長 総合計画を実施する上では市職員だけでやっていくというのは不可能で、市民の皆さんと様々なことで手を組んでいく必要があり、市民との協働は大きなテーマである。自然にゆるくつながる方向で取り組んでいきたい。

部 長 ある程度大きなところで将来的に農地にし、生産を上げていく場合には補助金を出せるが、せんで畑的に開墾する場合には難しい。制度として存在しない。

参加者 農地ということだけでなく、観光地としての価値が高い。都市環境整備として取り組めないか。

市 長 農業政策は生産力の向上を考えているから、むしろ景観で別の制度を作らなければだめ。観光としてならあり。

参加者 土地さえあれば何でもできると思っていたが、そういうわけではなかった。ただ、500坪くらいの土地だと、オープンガーデンのようなやり方ならば有効に活用できるが、農業をやりたいという人に農地として貸すには少し狭すぎる。

参加者 オープンガーデンの案内役をやっているが、行政側にもそういった案内役をしてくれる人・部署があればありがたい。

市 長 総合窓口が必要。まずまちづくりに来てもらって、そこから寄り添って案内できれば。

参加者 水、空気、空間の在り方どれをとっても安曇野が最高だと思っている。生まれ育った埼玉は自然が無くなってしまっていて、そこへ行っても故郷に帰った、安心したという気にならないが、安曇野に帰ると安心する。都会に住んでいた娘たちが、以前は「田舎は嫌」と言っていたのに最近移住してきた。暮らしていく中で、「この安曇野を後世に残していきたい」と強く思う。ハーブガーデンも安曇野に合っている。農地の保全、地下水の保全、屋敷林など、動いている人たちがいるのでゆるくつながって、オープンガーデンをやっていけたらと思っている。市のサポートもお願いしたい。

市 長 今年のガイドブックは、何とか市で発行できたらと思うので検討する。

参加者 オープンガーデンをするために農地を取得したが、農地法の制限が多く、いろいろやるには宅地にしろと言われる。それでは農地にしようとしているのに意味がない。もう少し何かならないか。

市 長 農地法はそもそも農地を守る法律。食料を増産しないと国民が飢えてしまう。だから農地を守るというのが大前提。安曇野の特徴は、大地主があんまりなくて自作が多いこと。そこそこ自給できる農地を持っていて、そこそこのお金を持っていて、こどもたちにお金をかけるというような歴史があった。新潟などは、何百丁歩の大地主だともすごい豪華な家があるが、こころへんはそこそこ宅地も広くて、家も大きくてというのが、せんで畑の文化が根付いた理由と考えられる。

市 長 安曇野スタイルなどのクラフト、観光、ゲストハウスや移住との関係など、考えることがたくさんある。

参加者 ゲストハウスの利用者の中には移住を考えている人もいる。実際に安曇野市内のゲストハウス経由で連絡をもらい、ゴーラウンドガーデンのボランティアに参加してくれた人もいる。

市長 ゲストハウスのオーナーさんの力はすごい。横の繋がりもある。

参加者 コロナで下火になっていたが、農家民泊事業の復活を願っているし、農家民泊の中でせんぜ畑や農業に関わってもらうのもいい経験になるので、会でも受け入れに協力できればいいと思っている。少しでも安曇野の役に立てればと思っている。